

2024年度口語詩句奨学生選考総評：木下龍也

奨学生の選考にご応募された皆さま、おつかれさまでした。この総評をもって、口語詩句投稿サイト72hでの僕の仕事は最後となります。下記は、奨学生に選ばれた方で、僕が票を入れた作者と印象に残った作品です。

・松下誠一さん

具の遠いおにぎりの具に辿りつく

胎内にいちまい濡れるあぶらあげ

素通りしがちな日常の切り取り方も、組み合わせによる奇想の見せ方も抜群に巧く、575の速さやサイズ感をしっかり掴んでいる。読んでいて面白いのはきっと、言葉同士がその新鮮な並び方、隣り合い方に喜んでいるからだろう。名前を伏せて選んでいても、松下さんの作品はわかるのは、自身の作風を確立されているということだ。それをどう育てていくか、どう壊していくか。飽きないように楽しみながら歩んでほしい。

・あおさん

でも無職やからと友は会うたびに
言う会うたびに言う ねえ桜

持っている指輪を全部はめてみる
夜を奇妙にやり過ごしている

あおさんの短歌は、他者や自己の内面の奥行きについて、言葉で無理に照らそうとしたり、答えを出そうとしたりするのではなく、ここから先はわからない、だからあなたもここに立って考えてみてください、というふうに読者を引き込む。踏み込めないラインを知っているというか、そのラインにつま先が触れたとき短歌ができるのかもしれない。今後もそのラインをたくさん見つけられるといい。

・汐見りらさん

Summerの筆記体は簡単

きみの気がすむまで
波を書き足せばいい

フェラムネ鳴らすかたちで
口づけをするから走ってこいよ
純心

光は過去や未来にあって、それらに挟まれた今は薄暗い。過去には戻れず、未来には進めない。今が連続するだけの日々は、いつまでも薄暗い。だからこそ、前後の光がよく見えるし、前後の光に手を伸ばせるし、ときおり前後の光を痛いと思える。一年を通して拝見してきた汐見さんの短歌からはそんな印象を受ける。そのうち当たるスポットライトに今の薄暗さを奪われたとしても、内面の薄暗さは奪えない。こちらの身勝手だが、短歌をつくり続けてほしい。

・ひろみさん

まだ誰も彼もが
生きているような気のする
午後の葉桜の前

バックミラーを抜け出したくて
少しずつ
冬夜の後部座席に沈む

台詞のないシーン、台詞の余韻に包まれているシーン、そういった静けさを映像的に描写することのできる歌人だと思う。映画のワンシーンのように感じるのは、カメラで撮影したような描写が多いからだろう。主観で周囲を観察し、どの角度から撮ればもっとも美しく見えるか。それをしっかり意識して短歌をつくっている方なのだろう。ジャンルで言えばひろみさんの短歌

はドキュメンタリーな気がするのだが、ホラーとかミステリーとかSFなどの歌も、そのカメラがあれば、きつとうまく写せる。

・小宮颯人さん

悲しみが染み付いている家にある
ペットボトルのボウリング場

爆発の中ほどまでお進みください
君が始めた戦いだろう

小宮さんの短歌は悲しみや怒りの圧縮や洗練の仕方が丁寧で、丁寧だからこそ、より悲しみが伝わってきたり、怒りが伝わってくる。時間をかけて伝えられているからこそ、この人がどれだけ悲しくて、どれだけ怒っているかがよくわかるというような感覚だ。これはおそらく短歌の効用でもあるし、小宮さんはそれが巧いので、作品の割合を57577に振り切ってもいいんじゃないかな、と歌人としては思う。

・中矢温さん

十月の天使につむじ踏まれたわ

一月～十二月を句のなかのどこかに入れるという制約をご自身で設け、かつバリエーションを披露する手腕が素晴らしかった。また、その制約を縛りとは感じさせず、続く言葉や前後に置く言葉によって、一月～十二月が本来持つ意味の濃度を高めたり、変質させたり、破壊したりしながら楽しませてくれた。

・長谷川柊香さん

斧を振るねばつく斧を振る

「ねばつく」によって、第三者だった僕がこの風景の主体にされ、「ねばつく」感覚を急に手渡される。なぜ「ねばつく」のかはわからないまま、不

穏な空気のなかで、「斧を振」らされる。この引き込み方が素晴らしく、恐ろしかった。

・雲理そらさん

天国じゃみんな、名前を忘れてて
さいごのごはんの献立で呼ぶ

生前の「名前」は「忘れて」いるけれど、「さいご」に食べた「献立」は覚えている人々。例えば、ナポリタンでは数人が振り向くかもしれないが、ナポリタン・シーザーサラダ・オレンジジュース、ならひとりに絞れるのかもしれない。現世で木下と「呼ぶ」か、木下龍也と「呼ぶ」かの違いみたいなものか。切なくも、ユーモアのある歌だった。

下記は、奨学生には選ばれませんでした。僕が票を入れた作者と印象的だった作品です。

・からすまあさん

でたらめな文脈のあと
ぼくのこと抱きしめたでしょ
それが蝕です

・マズルカさん

生きている理由のひとつが
きびなごの酢味噌が好きって、
それでいいかな

・駒鳥朋名さん

雨が壊れている
どうして
大宮駅の改札にあなたの洗濯機

・中原紘さん

天国に命を返すみたいだね
君の綺麗なフリースローは

・志内悠真さん

上の橋を二台の自転車は渡り川に
落ちやすい方がはやかった

・永山逢海さん

たいていのことは
どうにかしてくれる
居間の筆筒の上のファービー

・橋口諒介さん

蜂蜜がはるか上から垂れている
そして下へとまた垂れていく

以上です。これまでたくさんの作品をありがとうございました。
いつかどこかで、お仕事をご一緒できることを楽しみにしています。

木下龍也